

かじかの念仏

昔、西野で長雨が降り続き、西野川が増水して、神田の集落が水害をうけそうな危険にさらされた。心配した村人たちは一軒の家に集まり一晩中、万が一に備えておった。

夜明け少し前に、その家に突然、白装束をした子供のように小さい人が訪れて、

「みなさん、川も水が出て大変だが、それよりも向かいの山が崩れて、神田は埋めつぶされてしまう。早く山裾へ行って念仏を唱えて無事を祈りなさい」と、告げると、そのまま姿を消してしまつた。

集まつた村の人達は、不思議な事もあるもんだと話したところ、長老が、



「これは何かのお告げかも知れん。早速念仏をあげよう」と、言つて、どしゃ降りの雨の中を、教えられた山裾へ登つて一心に念仏を唱えて、無事を祈つた。すると、山のくぼみから一匹の白いかじかが、稲光のように輝いて、山の上の方へかけ上がり、同時に地響きのような山鳴りがして、それまでのどし

や降りの雨はやんで、山崩れからのがれることができたそうだと。神田の人達は、稲光のように輝いて山を登つた白かじかが、白装束の小人に身を変えて危険を知らせてくれたに違いないとして、『かじかの碑』を建てて、毎年田植え上がりには、白かじかの供養をすることにしたそう



血の池の話

小野原の奥に「血の池」と呼ばれる池がある。

昔、この池は山の奥で戦いがあつたとき武士たちが血のついた刀を洗つたため、池の水が血の色で赤くなつてしまつたそう

だ。それからというもの、いつまでもいつまでも、掘つても掘つてもこの池の水は赤い血の色をしているので、村人はこの池を「血の池」と名づけた。

今では水はないが、雨が降つて水が溜まつたとき、よく見ると赤く見えるそうだ。

「水無し八丁」の川原に弁財天の岩といわれる大岩があつて、その岩の上に弁財天の祠がある。ここから、わずか川下にくつた山手に大砂利の大岩がある。村の人はこの大砂利の大岩を「去る石」とよんでいる。不思議なことに、この「大岩」は、一年間に米一粒の距離だけずつ、弁財天の「川の岩」に近づいていくそうだ。

弁財天の大岩と大砂利の大岩

『山の太岩』がこれから何万年もの先に、川上の弁財天の大岩に接触した時は、天変地変が起こるとともに、この世が終りになる』といい伝えられている。

「去る石」という呼び名は去る―移動する―という意味だそう

第19回

開田高原フォトコンテスト



「遊牧」 池田昭二さん(長野市)

略

編集後記

◆「暑さ寒さも彼岸まで」と言われますが、標高1100mの開田高原は、お盆を過ぎて朝晩めっきり涼しくなってきました。心なしか少し寂しさを感じています。

◆9月に入ると11日には衆議院議員の総選挙、続いて14日に敬老会。さらに10月はそば祭り、村民運動会、閉村記念式典等々、イベントや行事が目白押しです。◆合併まで余すところ約2カ月。「広報かいだ」もあと1回の発行を残すのみとなりました。

(ふ)